



TITLE:

<批評・紹介>後藤富男著「内陸アジア遊牧民社会の研究」

AUTHOR(S):

田山, 茂

CITATION:

田山, 茂. <批評・紹介>後藤富男著「内陸アジア遊牧民社会の研究」. 東洋史研究 1968, 27(1): 111-112

ISSUE DATE:

1968-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152757>

RIGHT:

自己の研究に生かして行かれるよう望むのである。終りに博士が益々御健康で、何時までも學界の巨星として我等を導かれんことを祈りかつ希うて已まない。

註一、唐初の殘疾については新著一五八頁十二行の賈公彥疏も參看。

註二、「均田法とその税役制度」二七九頁六行に引用された玄宗の制の「賦租課役」は、言葉であつて法的用語ではない。

(一九六八・三・二〇 濱口重國)

内陸アジア遊牧民社會の研究

後藤 富男 著

昭和四十三年三月 吉川弘文館發行
A5判 四三二頁

畏友後藤富男氏の力作、内陸アジア遊牧民社會の研究が刊行されたが、この雄篇の全貌を盡すことは到底不可能であるので、その一斑について紹介の文をよせたい。

本書では内陸アジアの遊牧民社會について、遊牧論(第一章)、牧畜技術の傳統(第二章)、牧畜労働(第三章)、家畜財産(第四章)、牧地―その所有關係、社會集團(第五章)、漢人商賈(第六章)等を記述の對象としている。

第一章では、水草を追つて遊牧する一見原始的な生活が、實は家畜の馴致、去勢、計畫的移动等をなして始めて可能であることを明

らかにしている。

第二章では、五畜(羊・山羊・牛・馬・駱駝)の放牧管理をそれぞれの家畜について述べ、これによつて各家畜の性質がよく理解されたと共に、家畜の組合せによる放牧がいかに大切であるかを知らる。家畜の年齢別名稱や家畜群の構成等にもみるように、實體調査による資料をよく収集して利用されてある。遊牧民の生活の基礎がすべて家畜によることは、我々も常に聞く所ではあるが、乳製品、毛氈、役畜等についてその製法や利用價值等を餘す所なく傳えている。ことに去勢馬が軍馬、役畜としていかに秀れているかをとき、古來遊牧民が北アジアに雄飛した事由がここにあることを示しているのは傾聴すべきことである。

第三章では、男女の分業成立の要因をのべ、ことに労働組織としてのサーハルタ、スルグの制度にふれていのが目につく。遊牧民の家畜管理をみると、例えば羊が五〇頭でも百頭でも、同じ一人の牧人が必要である。これをまとめて放牧すれば、人の努力はきわめて經濟的になる。いくつかのアイルが協力して、一人の力にする「協力の慣行」をサーハルタという。この慣行では代償としては餘り求められる所がなかったらしいが、とにかく獨立生産者相互の平等な協力關係であつた。サーハルタを形成するアイルの一團がホトンといわれる社會集團の單位である。もう一つのスルグは家畜を委託する制度で、その原因は種々あつたらしいし、また條件も様々であつた。これは本質的には富戸と貧戸との關係であつた。この小作關係にもたつた労働結合の研究は未だ不明の所が多いが、多くの史料を求めてこの重要な研究題目を提起されたことを特記せねばならぬ。

第四章家畜財産では、家族内における財産所有の實態、獨立生産

者の各家畜の所有區分、階層別にみた家畜所有者區分等を、最近の資料によって説明されている。ことに著者の實態調査された結果を中心として示されているが、この種の記述としては他の追隨を許さないものであらう。放牧や狩獵等にかくに馬が重大な役割を果して來たか、特に騎馬戰におけるその價值は絶大であったことは周知の通りであるが、この大馬群の保持のため去勢馬の果した役割、部族間の鬭争の事由となつたこと、封建領侯が如何に努力したか等に關する記述もみのがせない。

第五章では、遊牧民の土地所有の觀念、遊牧單位の土地所有の慣行、氏族・ウルス等の土地の領有等について述べてあるが、ウルスにおけるエジュンの土地支配について、宗法封建制を部族社會よりの過渡段階とみる學說（トゥルベイコフ）と封建制度の初期形態であるとする學說（ポターポフ、ズラートキン）を批判し、眞はむしろその中間にある點を力説してあるように、氏獨自の見解が所々に見受けられる。

第六章では、漢人商賈の行なつた草地貿易の實態を多くの統計資料を駆使して、具體的實證的に説明しようと努められている。

本書のすぐれている點は、

一、廣く過去の歴史にさかのぼつて史料を拾ひ、ことに近年における遊牧社會に對して行なわれた調査や論著等を、餘す所なく利用されて、論旨に對する裏付けが見事であること。

二、牧畜技術における放牧、生活手段としての食肉、酪、役畜及び家畜財産等に關する具體的記述、これらを知らずに北アジア史を論ずることは不可能と思われること。

三、遊牧論、去勢馬の遊牧社會にしめる役割、勞働結合としての

サーハルタ、スルグ制の意義、牧地の所有關係よりみた遊牧的封建制度論について、多くの新しい見解が示されていること。等を數えることができる。

著者はもと經濟學を専攻してから歴史に入られたので、經濟に關する資料のとり上げ方、論の進め方等において、人類學や歴史學の枠を越ええない者には、廣い視野からの立論が見事である。このことは一方歴史のみの者から見れば、例えば牧地の所有關係や漢人商賈のモンゴリア進出等について、未だ史料はある様に思う點も若干は見出される。これらの點については、將來御教示をおおぎたいと思つている。

（田山 茂）